

独孤信石炭製多面体印と独孤信の後裔たち

—— 付、中国出土ビザンチン金貨表 ——

秋 山 進 午

はじめに

敬愛する先輩、岡崎敬氏が亡くなられて、はや13回忌が過ぎた。考古学を専攻して大学を卒業したものの、学芸員の道を選んだために研究進路に迷った筆者を、励まし続けて頂いた厚恩は片時も忘れたことはない。その後、1990年、北京の中国歴史博物館で独孤信の墓誌を実見し、帰国後、資料を再検討して小論を発表出来たのも、先に岡崎敬氏¹⁾の名論考の一つ、「隋趙国公独孤羅の墓誌銘の考証」があつたればこそなのである。

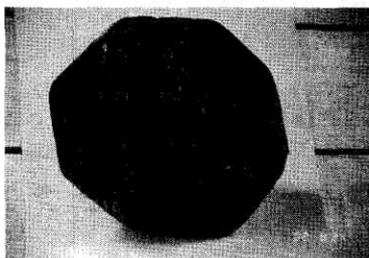
昨（2002年）夏の西安旅行のうちに、陝西歴史博物館において、再び独孤信に関する遺品を実見することが出来た。独孤信石炭製多面体印がそれである。以下に紹介するように、出土の状況からして、はたして本物かどうか疑わしいところがあるが、ともかく、独孤信とその一族に再び取り組むきっかけとし、その後に発表があつた独孤信の後裔たちのことと併せて取り上げてみたい。

岡崎敬氏が独孤信と独孤羅に取り組んだのには、独孤羅墓から出土したビザンチン（東ローマ）金貨への関心が大きく作用している。今回紹介する独孤信の後裔にも、ビザンチン金貨を出土したものがあつた。筆者の力量とはかけ離れた問題ではあるが、折角の機会であるから近年出土のビザンチン金貨の集成を行ない、拙い紹介を試みようと思う。先学の叱正を御願ひするところである。

一、独孤信の石炭製多面体印

本稿に取り組むきっかけとなったのは、先述の通り、昨夏の西安旅行の際、陝西歴史博物館において独孤信の石炭製多面体印を実見できたことからである（写真一、参照）。この印についてはすでに『文博』に報告が出されているので、先ずそれから紹介しよう³⁾。

印は高さ4.5㎝、幅4.35㎝、重さ75.7g。石炭を八稜多面体のサイコロ状に成型して、



写真一 1 独孤信石炭製多面体印（写真）、筆者撮影

正方形部分を十六面、三角形部分を八面、併せて二十四面体に形造る。鈕はない。印面はそのうち一辺、各2稜の正方形部分を使用するが、実際に彫られた印面は十四面で、二面は印文がない。印文は実見と写真から「臣信上表」「臣信上章」「臣信啓事」「大司馬印」「信啓事」「令」「密」の七面を確かめることが出来たが、報告にある「臣信上疏」「大都督印」「刺史之印」「柱国之印」「独孤信白書」「信白箋」「耶勅」の七面は確かめることが出来なかった。印文であるから勿論反字の陰刻楷書で彫られている。報告掲載の写真が正対の文字になっているのは、捺印して貼り合わせ、撮影したものと思われる。

この印にある独孤信とは『周書』、『北史』に伝がある北朝の武将である⁴⁾。その生涯は先の岡崎氏の論考や、その驥尾に付した筆者の論考に詳しいので、ここでは簡略に述べるにとどめておきたい。

独孤信の本名は如願。北魏の武川鎮軍閥集団⁵⁾を率い、東魏の高歡に対抗して西魏の実質的な支配者であった宇文泰の信頼厚い武将の一人として活躍し、西魏の八柱国の一人となった。名前の“信”は隴右十州大都督、秦州刺史として今日の寧夏六盤山以西、甘肅の黄河辺までの統治にあたり、「数年之中、公私富実、流民願附者数万家」の成績をあげ、宇文泰より「以₂其信₁著₂遐迹₁、故賜_レ名為_レ信。」として大統六年（540）に与えられたものである。大統十四年には柱国大將軍を拜し、さらに大司馬に任じられたのは大統十六年（550）である。報告された多面体印に‘信’、‘柱国’、‘大司馬’が揃ってあるのは、大統十六年から、宇文護の暗殺陰謀に連座して自殺に追い込まれた北周建国の元年（557）までの僅か七年間となる。

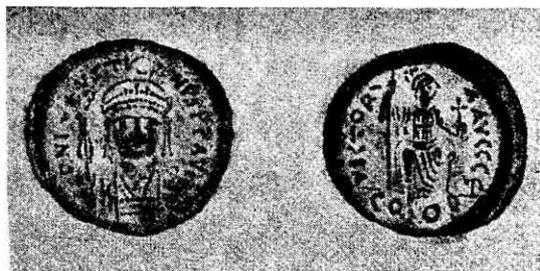
この印の材質は石炭である。石炭を印章に使った例として思い出すのは、早く史樹青氏によって報告された、1958年、新疆ウイグル自治区民豊県採集の「司禾府印」位であろうか⁶⁾、報告者は恐らくニヤ遺跡の出土品であろうとしている。石炭を削って橋鈕の付いた青銅製印章の形状としたものである。新石器時代以来の石炭製品を集めた祁守華氏によると⁷⁾、装身のための飾珠に使われた例はかなりあるが、印のようなかなりの大きさの器物にされた例は、他に甘肅省嘉峪関魏晋墓群のやはり石炭製の印章として表の20にあげられているが⁸⁾、未報告であるため、詳細不明である。

しかしながら、この印には未だ絶対の信頼を置くことは出来ない。其の理由はこの印が独孤信の墓からではなく、同じく陝西省であるとはいえ、関中から南へ秦嶺山脈を越えた漢水流域の旬陽県からの出土だからである。さらに、出土地点が近年、洪水で破壊された明代の察院行署・布政分司行署・按察分司行署・漢中府行署・旬陽県署遺跡からなのである。

独孤信の墓については、未だ正式の報告はなされていない。しかし、その墓が独孤氏の塋地である渭河北岸の咸陽原に営まれたことは間違いない。この印が墓中にあったとするならば、盗掘の際に持ち出されたものか、あるいは、この印が正式の身分をあらわす官印ではないところから、自殺を迫られた騒然たる中での埋葬には伴われず、他の場所に伝世したものかもしれない。いずれにしても、この印については、そのように絶対の信を置くまでには至らないながら、再び独孤信とその一族の、その後の展開を追うきっかけにしたい。

二、独孤羅と妻賀若氏墓

独孤羅は独孤信の庶長子であるが、父の独孤信が宇文泰を慕って鄴を捨て長安へ出奔した時、その母と共に、生れて間もなく置き去りにされたものである。北齊滅亡の後、定州総官を務めた楊堅と腹違いの妹独孤氏、即ち後の隋文帝と独孤皇后に見つけ出され、あい見て悲しみに自ら勝えず、侍御するもの皆泣いた、と、その間の一方ならぬ有為転変の思いが互いにこみ上げたものであろう。やがて、北周も滅び、楊堅が隋朝を草創する。先に宇文護の誅殺を計ったとして自殺を命じられ、断絶していた家名の回復の機会がやってきた。独孤羅は正妻の子の善以下から、庶長子のゆえをもって後継ぎには相応しからず、と排斥されたが、独孤皇后の「羅は嫡男にふさわしく、誣するべからず。」の一言で父の爵の趙国公と領地一万石を継いだ。羅の生涯は『隋書』卷七十九、外戚伝に独立の伝がある。その伝と墓誌銘をもとに、先の岡崎氏の論考に詳しく、筆者も驥尾に付して論じたところであるので、詳細はそれらに譲りたい。^{1・2)} その独孤羅の墓から出土したビザンチン皇帝ユスティヌスII世の金貨は、早く夏鼐氏によって詳細な研究が発表され、東西交渉史の再検討のきっかけとなったことで著名である（写真—2⁹⁾）。金貨は直径2.1糎、重さ4.4瓦。表面の像は髯が短く、羽毛飾の兜を被り、真正面を向いた皇帝の胸像である。右手には勝利の女神を載せた地球を捧げ持ち、左手は騎士文装飾の盾を支える。裏面の女性像を夏鼐氏は勝利の女神ビクトリアとしているが、近年、陳志強氏はこれを首都コンスタンチノーブルの象徴のアントウザとする。¹⁰⁾ 彼女は玉座に坐し、右手で長い槍を立て、左手に十字架を乗せた地球を押し、キリスト教による世界制覇を象徴する。陳氏は併せて、夏鼐氏の銘文の読みのうち、幾つかの読み誤りを指摘している。



写真—2 独孤羅墓出土ユスティヌスⅡ世金貨拓本
(夏竦『考古学論文集』より)

ところで、近年、その独孤羅の夫人賀若氏の墓が報告された¹¹⁾。発掘されたのは1988年、咸陽飛行場建設に伴ってである。他の北周以降の墓と同様、斜め墓道を南に開いた土洞墓で、墓の全長は35.97米、墓道、過洞、天井、甬道、墓室からなる大型墓である。墓道は長さ9.1米、幅1.5米で7つの天井を持つ。甬道は長さ20.5米、幅1.35米、最奥の墓室は方形平面で南北長さ3.35米、東西幅3.21米、四壁の高さは1.9米、天井部は破壊されていたが恐らくドーム形であったであろう。墓室の西部に木棺があった。棺は腐朽していたが痕跡は明瞭で、長さ2米、北の頭側の幅74糎、南の足側が65糎である。棺内に仰臥伸展の人骨1体があった。南から3～6番過洞の東西壁には彩画の壁画がある。3・4番過洞の壁画は黒色小冠を被り赤の広袖長袍を着て黒靴を履き、剣を按じる武人である。5・6番過洞には同様の服装で、手に笏か供物を持った文官が描かれている。甬道の東西壁面には手に供物を捧げた侍女像が描かれており、これらの唐代初期の壁画は盛唐期の壁画とは様式が異なり、研究に値すると報告されているが、報告には詳しい写真が掲載されておらず、詳細が明らかでないことは誠に惜しまれる。¹²⁾

この墓が独孤羅の夫人賀若氏のものであることは、墓誌から明らかとなったと思われるが、報告には賀若氏が唐初の武徳四年(621)十一月に六十三歳で亡くなったこと、その夫が独孤羅であったことを記すのみで、墓誌の写真さえ発表されていないため、それ以上の詳細を明らかにし難いことは残念である。

すでに明らかになっている如く、独孤羅には庶長子として独孤開遠がおり、その墓誌が発見され、筆者が先に論じたところである¹⁾。嫡男は纂で隋に仕え河陽郡都尉となったことが『隋書』卷七十九の独孤羅伝に付記されているが、その後のことは明らかでない。次男の武都は洛陽にいたが、隋末の混乱の中で王世充に殺された。この纂と武都を生んだ羅の正妻の名は正史からは明らかでない。羅の子供たちのことは他にみられないところから、今回、墓が発見された賀若氏が正妻であると考えて誤りなからう(系図参照)。

墓からは見事な金銀器物の副葬品が発見された。金宝石飾冠は金花鈿、金花細葉、玉片、真珠や各種宝石、緑松石珠を連綴した華麗な冠である。出土のとき、綴じ付けてあった布類は腐朽し、金圈が遺骸の頭骨上に残っていたほか、その他の珠類は周囲に散ら

ばっていた。当時の華麗さをしのばせる装身具である。金櫛は出土時なお木製の櫛歯が残っていた。篋は純金で作られ、長方形で長さ5糎、幅1.5糎、地文に金粒を敷き、両面に文様をあらわし、周囲は連珠文を飾る。一面は双鵲が蓮に戯れ、別一面は蓮と双梅で、いずれも細金条で外形を作り、中に各色の宝石を鑲嵌している。細金細工耳飾は一对ある。長さ3.6糎、オリーブ形で逆U字形の鉤をつける。中央に連珠形の帯を回らし、上下に花びら形をつけ、下（上？）端に小環を付ける。文様は皆細金条で輪郭を作り、中に色とりどりの宝石を鑲嵌する。金簪は四本ある。金条線を断面円形に加工し、細長いコ字形に折り曲げてある。これら副葬品の写真は発掘概報では印刷が不鮮明であるが、幸い1996年、兵庫県立歴史博物館を皮切りに開催された『大唐王朝の華——都・長安の女性たち展』に、次のビザンチン金貨とともに出品され、鮮明な印刷で検討が可能となった。¹³⁾

副葬品のうち、最も興味をひくのがビザンチン金貨である（写真一3）。出土のとき墓主の口中にあった。直径2糎、重さ4.1瓦、左右両側近くに懸垂用の小孔が開けられている。型押し文様の表面が皇帝の胸像で頭に羽飾の付いた兜を被り、鎧を身に付ける。右手に持った槍を右肩に担ぎ、左肩は騎士像装飾の盾で覆う。周囲の銘文はDNIVSTI / NVSPPAVCとある。背面は有翼の女神が右手に杖を持ち、左手に十字架を載せた地球を捧げる。銘文は左方がVICTORI、右方がAVCCCB、下方にCONOBである。この金貨について、発掘簡報は夫である独孤羅墓出土のユスティヌスII世（565—578在位）金貨と同一としている。恐らく、銘文からそう判断したものであろう。しかし、ユスティヌスII世金貨と決定的に異なるのは、表面の皇帝胸像である。すなわち独孤羅墓出土のユスティヌスII世金貨では、右手に地球の上に立つ勝利の女神像を捧げるのに対して、この賀若氏墓出土金貨では、右手は槍を持って右肩に担いでいる姿なのである。この相違から、銘文は全く同一であるが、この金貨をユスティヌスI世（518—527在位）金貨と改めるものである。

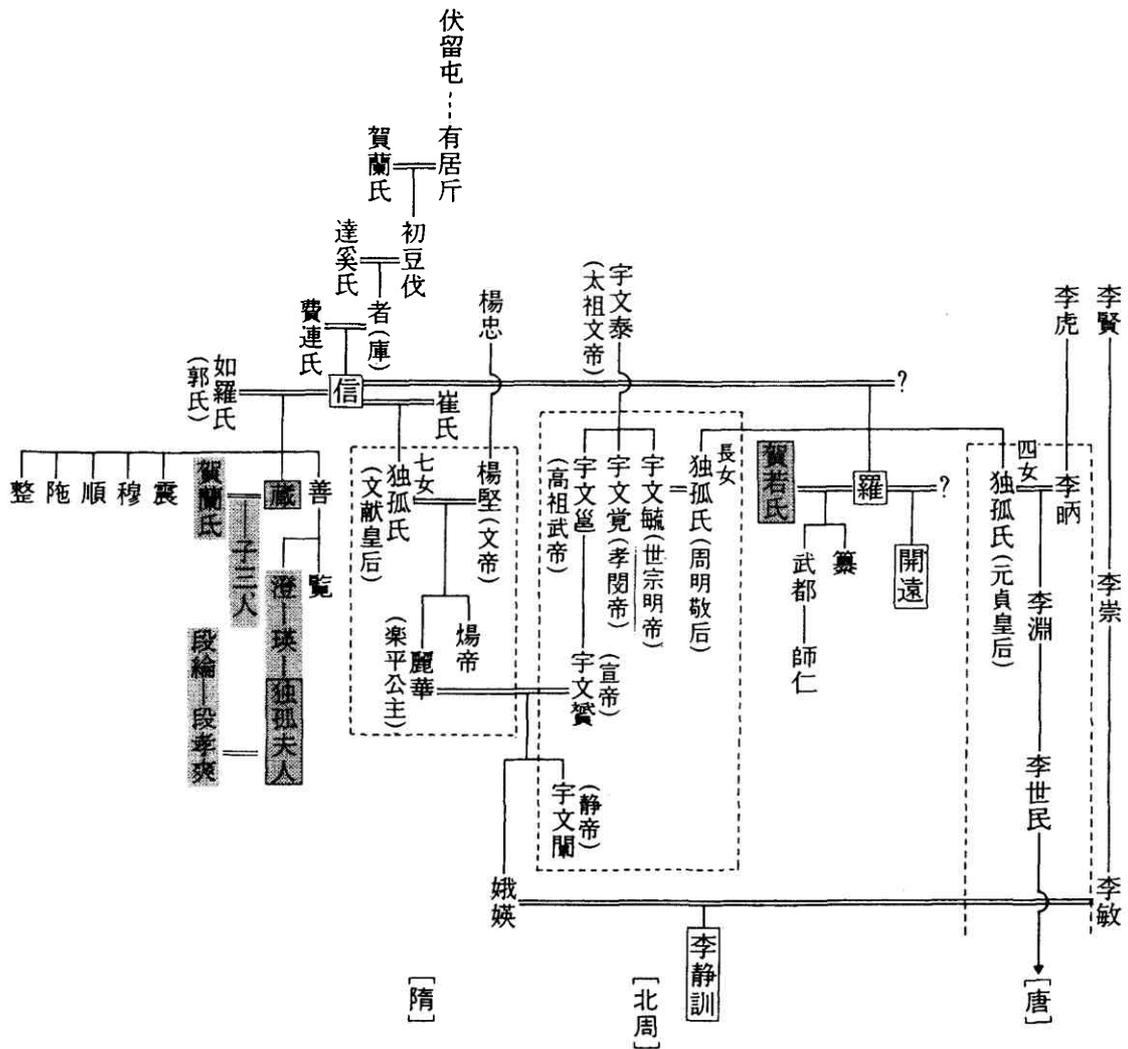
夫の独孤羅が六十六歳で亡くなったのは隋開皇十九年（599）である。夫人の賀若氏が亡くなったのは初唐の武徳四年（621）六十三歳であるから、夫の独孤羅死去の時、



写真一3 賀若氏墓出土ユスティヌスI世金貨
（注13 図録写真より）

夫人は四十一歳であった。二人が何時、何歳の時に結婚したかは、今は定かでないが、夫より二十五歳も年下である。夫の独孤羅もすでにその生涯をつぶさに見たように、北魏末年に生まれ、東西魏そして北周と北齊の対立から北齊の滅亡、さらに隋朝の成立と、激動の中で歴史の荒波にもまれて来た。独孤羅がようやく隋朝において趙国公、一万石の爵位と領邑を得たのは、生れてすぐに置き去りにされ、恐らく顔さえ覚えていない亡父独孤信の赫々たる家柄と、とりわけ三朝の皇后を輩出した姉妹たちの庇護によるものであった。

夫人賀若氏の系図は報告からでは充分明らかでないが、その姓からみて独孤氏と同様、北方系の民族の出身である。姚薇元氏の『北朝胡姓考』には『元和姓纂』の「魏では忠貞を賀蘭という。従って、孝文帝の改姓の時も賀蘭の二字のままであった。」との記述が引かれ、さらに、この賀蘭氏が賀若氏の誤りであることが考証されている。¹⁴⁾



独孤氏系図 * □囲みは墓誌のあるもの。
** 網目部は本稿で明らかとしたもの。

独孤羅が死去したあと、先述のごとく独孤家は嫡男の纂が後を継ぎ、隋に仕えて河陽郡都尉になったことが『隋書』卷七十九、外戚伝中の独孤羅伝に付記されているが、その後のことは明らかでない。次男の武都是洛陽にいたが、隋末の混乱の中で王世充に殺された。乳母の王蘭英が遺児の師仁を戦乱の混乱のなか、餓死者が路にあふれる時、自らは土を喰らい水を飲むだけで遺児を守りぬき、ようやく長安へたどり着いた。李淵（唐高祖）は義として王蘭英を永寿郡君に封じたことが『旧唐書』卷一百九十三、列女伝中に記されている。このことは『新唐書』卷二百五、列女伝にも記されているが、こちらでは王蘭英が封じられたのは永寿郷君と異なる。庶子の独孤開遠も煬帝の側近にあって、宇文化及の弑逆軍のために殺される場所であった。

そうした隋末唐初の混乱に、賀若氏は婦人の身でどのように処したのであろうか。独孤羅のユスティヌスⅡ世金貨にも、上方に懸垂用の小孔が一つ開けられていた。夫婦の間にこのビザンチン金貨をはさんでどのような会話なり、約束なりがあったかは知る由もないが、夫婦で同じようにビザンチン金貨を一枚ずつ身に付けていたところは、何かの縁を結び合わせていたのではないかと、との思いを禁じ難いところである。

三、独孤信の後裔たち

独孤信とその後裔たちについては、すでに独孤信に加え、庶長子の独孤羅と、羅の庶長子独孤開遠の墓誌が併せ発見されており、それぞれのその後を追うことが出来た。以下に、その後の発掘で明らかとなった、その他の一族の様子を紹介してみたい。

独孤藏墓 独孤氏一族のうちで今のところ、最も詳細な調査報告が出されたのは独孤藏の墓である。藏は独孤信と正妻如羅氏（＝郭氏）との間の子で、独孤信の墓誌では「長息善」に続き「第二息藏 字拔臣 武平県開国公」として名を連ねているが、『周書』『北史』の独孤信伝には間にもう一人、独孤穆の名がある⁴⁾。

独孤藏の墓は陝西省咸陽の咸陽飛行場建設に先立つ調査として1988年に発掘された（図1-1¹⁵⁾）。墓はこの地の北朝墓と同様の造りで、南向き斜め墓道付き三天井多室土洞墓で未盗掘であった。墓道は長さ23.8米で三個の天井を持ち、壁面には線だけの彩色があった。甬道は長さ3.1米、幅約1.5米で北端に墓誌が置かれ、その後ろに木製扉があった。墓室は前室・後室・東耳室からなる。前室は南北2.7米、東西2.8米の正方形で、ドーム天井となる。後室は前室北壁中央に龕を穿った形で造られ、幅1.4米、高さ1.46米、奥行き2.2米あり、中に木棺を納める。一木の棺台に置かれた木棺は二重で、外棺の長さ2.2米、前幅90糎、後ろ幅72糎、高さは記載がない。中に内棺を取め、完全な人骨一体があった。耳室は東壁の南よりに穿たれ、門口の回りに4糎幅の赤彩がある。室は手前の幅80糎、高さ90糎、奥行き1.72米で奥の幅74糎、高さ64糎。中の木棺は長さ1.56米、

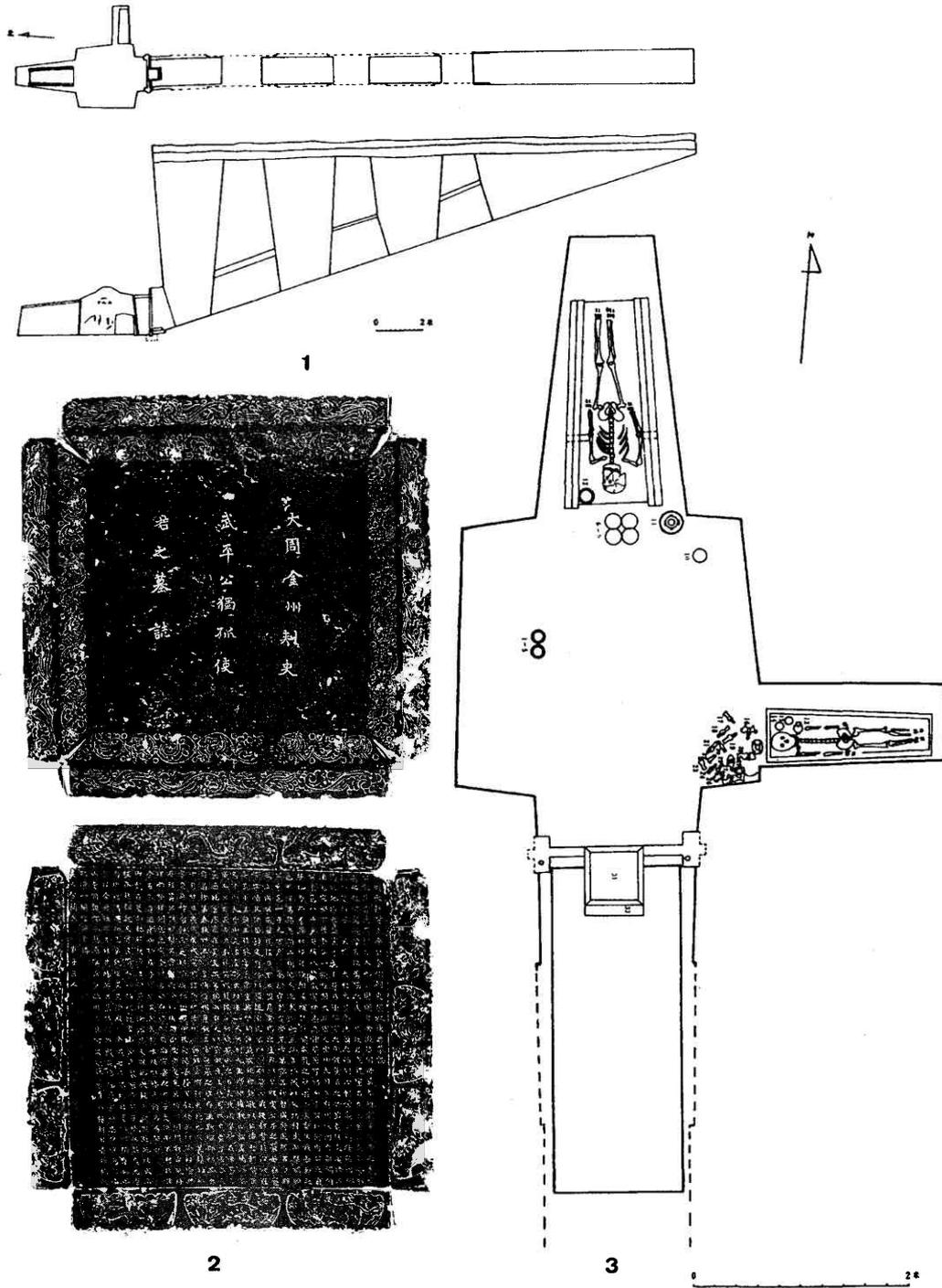


図1 独孤葺墓（『中国北周珍奇文物』より）

1 遺構平・断面図

2 墓誌・蓋拓本

3 墓室平面詳細図

前幅52糎、後ろ幅40糎、中に女性の人骨一体があった。

墓は未盗掘であるが水没したため、副葬品の位置は多少元と異なるかもしれない（図1—3）。先ず墓門前に墓誌と蓋があった（図1—2）。前室には中央西寄りに青磁碗5

点が双重ねと三重ねにして置かれ、東北部に青磁皿が各1点、中央部に鎮墓獸2点が置かれた。青磁碗4点は漆盤上に揃えて後室前に置かれ、そばに鉄鍬があった。後室の南部右方には青磁盤口六耳壺、白磁唾壺、黒磁盤口壺各1点、後室南部左方に褐色盤口四耳壺が置かれていた。後室棺内の頭骨左に灰陶五脚円硯1点があり、ガラス玉の首飾りが人骨頸部周辺にあった。武士俑1点、騎馬武士俑11点、騎馬儀杖俑13点、風帽俑10点、

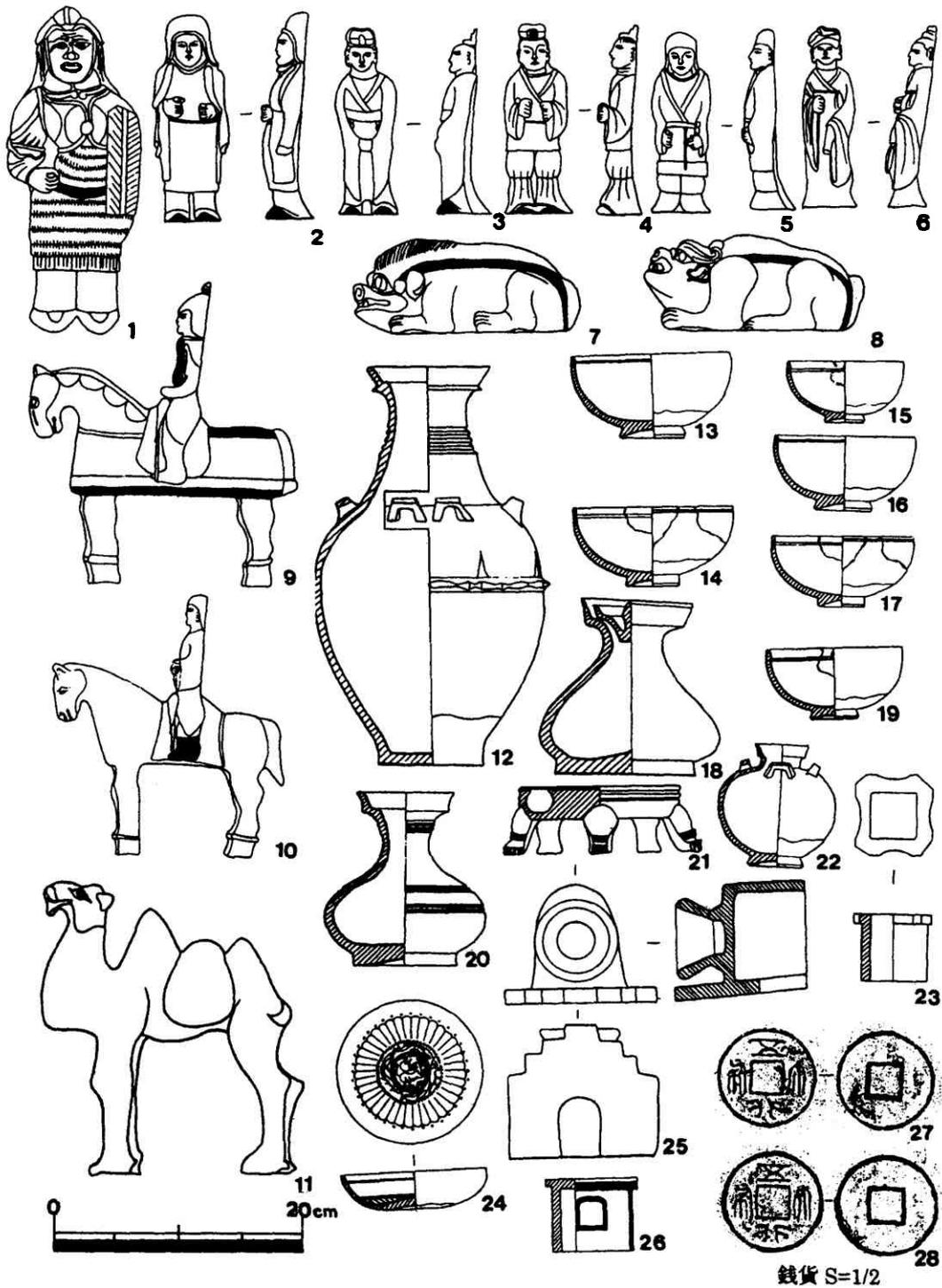


図2 独孤藏墓副葬品（『中国北周珍奇文物』より）

文吏俑9点、侍従俑11点、舞俑1点、跪坐俑1点、持箕俑1点は纏めて前室東南角つまり耳室前に置かれていた。また前室西南角には馬、駱駝、鶏各1点、牛、犬各2点の動物俑、倉庫2点、踏み臼、井戸、竈各1点の明器が纏められていた。耳室人骨には五行大布銭3枚が腰部にあった。以上の出土状況は報告本文によるもので、墓室平面図には相当の脱落と相違がある。146点の副葬品のうち、人物俑が68点（図2—1～6・9・10）、動物俑が7点（図2—7・8・11）、明器が6点（図2—21・23・25・26）と土偶類が半数を越す。

質実素朴な北周の土偶明器に比べ、この墓から出土した青磁、白磁、黒磁などは上質の磁器類である（図2—12～20・22・24）。北朝、それも東方の北齊磁器類が優れたものであることは、新中国の発掘調査によってすでに明らかにされたところであるが、西方の北周の状況は必ずしも明確ではなかった。その中で、この独孤蔵墓出土品は北周の磁器類の様相をうかがわせる新資料として重要である。とはいえ、北周における磁器生産の様相は未だ明らかになっておらず、或いはこの墓が築かれる前年に平定した北齊からの戦利品の可能性もある。今後の調査が待たれるところであるが、その中で、この墓から出土した青磁盤口六耳壺（図2—12）が、1997年開催の「中国文物精華展」の出陳物の一つに選ばれたのは、北周の磁器としての意義を認められたところによるものであろう¹⁶⁾。

独孤蔵は史書に独立の伝はない。出土の墓誌によると、諱が蔵、字は達磨、とあって、先の独孤信墓誌の字、抜臣と異なる。西魏大統九年（543）に独孤信の子として生まれ、八歳にして父信の功績をもって武平県開国公、食邑一千九百戸を賜った。母は正妻如羅氏（＝郭氏）である。以後は同年齢の、北周太祖宇文泰の第五子齊王宇文憲の帷幄に参じて都督となり、また譙王儉とも親しみ、隆山太守に任じられた。しかし、三十五歳の若さで宣政元年（578）死去したのは、昵懇であった齊王宇文憲が、兄武帝宇文邕の死後即位した宣帝に、才を妬まれ殺されたことに連座したからであろう。『周書』卷十二、齊煬王憲伝には同時に殺された人々に上大將軍安邑公王興、上開府独孤熊、開府豆盧紹の名が記されている。墓誌には独孤蔵の夫人賀蘭氏と子供三人とが記されているが子供の名は明らかでない。

大唐紀国公世子段府君夫人独孤氏墓誌 独孤夫人のことを記した墓誌は1993年、陝西省咸陽市渭城区底張鎮西郭村東北1.5軒の墓から出土した。地表に封土はなく、墓からは墓誌のほか將軍俑、侍俑と銅鏡等が出土したとあるが、発表されたのは墓誌のみの考釈で、墓の構造や副葬品の詳細は記されていない¹⁷⁾。墓誌は方形で45糎四方、蓋には「大唐故独孤夫人墓誌」九字が篆書で陰刻されている。誌文は楷書で21行、20字に総字数416字が陰刻されている。夫人の家系は独孤信に始まり、曾祖は善とある。独孤信の正妻如羅氏（＝郭氏）の生んだ長男であるが、隋になって家を再興するとき、妹の独孤皇

后の一声で庶長子の羅に地位を奪われてしまった。『周書』卷十六独孤信伝に附載された善の伝には、独孤信が宇文護の暗殺計画に関与したとして自殺させられ、家を廃されていたが、保定三年（563）龍州刺史、天和六年（571）河内郡公、邑二千戸を襲爵した。さらに北齊東征にしたがって功績をたて、上開府さらに兗州刺史に任ぜられたが三十八才で死去した。没年は記されていないが、天和六年ないしそれ以後、いくらかも隔たらない年であろう。死後に、使持節、柱国、定趙恆滄瀛等五州諸軍事、定州刺史を贈られている。

しかし、この独孤夫人墓誌に善が隋の柱国大將軍、冀・定等十州諸軍事、十州刺史、河内郡公とあるのは、隋になってからの追贈によるものであろう。独孤善の墓は未発見であるが、この墓誌の記載によって善の官爵が、隋の時に父等と併せ追贈があったことが判明した。祖父の澄は隋の千牛備身とある。これまで独孤善の子は覽の名しか知られていなかった。独孤氏一族では庶長子独孤羅の庶子の独孤開遠も隋の千牛備身であって、宇文文化及の反乱の時、反乱軍の犠牲になるところであったが危うく助かっている。独孤夫人の祖父は煬帝と運命を共にしたのであろうか。父の瑛は觀州刺史とのみ記されている。祖父といい父といい、あまり高い身分ではない。

独孤夫人の夫は紀国公世子段氏で、墓誌中に夫孝爽とある。考釈では先ず、周紹良氏の論考を¹⁸⁾引き、『新唐書』卷八十三、諸帝公主列伝にある「高密公主下₂嫁長孫孝政₁、又嫁₂段綸₁。綸、隋兵部尚書文振子。為₂工部尚書・杞国公₁。」と、『元和姓纂』卷九段氏、遼西条の「綸、工部尚書・駙馬都尉・紀国公。生₂孝爽₁。」とが共に同一人物の段綸であるのは確かであるのに一方は杞国公、一方は紀国公となっているが、『大唐故文安県主墓誌銘』に「…貞觀十五年正月五日、封₂文安県主₁。脂賦開榮、公宮徒訓、乃于其月十四日降₂嫁于工部尚書・駙馬都尉紀公元世子段儼₁。…」とあるように‘紀’が正しく『新唐書』の‘杞’は誤りとする。しかし、周氏はこの『文安県主墓誌』の段儼と『元和姓纂』の段孝爽とが同一人であるかについては不明としている。考釈は(一)『独孤夫人墓誌』にある段孝爽が紀国公‘世子’とあるのと『文安県主墓誌』に紀公‘元世子’とあるのは共に諸侯王の嫡男の意味であること。(二)儼が名で孝爽が字であろう。との二点をあげて両者が同一人であると断じている。いま、他に有力な史料のないまま、考釈の説に従うこととする。

「独孤夫人墓誌」によると、夫人は貞觀十二年（638）正月七日、洛陽の洛濱里で二十一才で亡くなり、同年二月廿二日雍州咸陽県洪渡川に埋葬したとある。墓誌の出土地はこれまで独孤氏の塋地であったところである。嫁いでいった者は多くが夫の塋地に葬られているが、この独孤夫人はどのような事情があったのであろうか。

四、近年新出土のビザンチン金貨

1953年独孤羅の墓から発掘された一枚のビザンチン金貨は、ヘディンの採集やスタインの発掘で知られていたビザンチン金貨が、中国本土にまで届いていたことを確認させる意味で、研究者の注意をひき、東西交渉史の研究に新たな弾みを与える資料となった。この発見を契機に、ササン銀貨を加えた中国国内発見の西方金・銀貨が注目されることとなった。東西交渉史に深い造詣を持つ夏鼐氏と岡崎氏らによって、先ず1980年頃までに発表された中国出土ビザンチン金貨の集成が行なわれた。ヘディンやスタインによる中央アジア発見品のほか、新中国による発見品には、独孤羅墓以下付表の23番までがそれである。『中国銭幣』2001年第4期には王仲殊・王世民両氏によって夏鼐氏の西方貨幣研究への貢献の様相が記されている¹⁹⁾。

続いて集成を行なったのは宿白氏で、『中国大百科全書・考古学』の中で、「中国境内発見的東羅馬遺物」の項目に集成表が掲載されている²⁰⁾。そこでは新たに河北省磁県東魏閻氏墓出土のユスティヌス・ユスティニアヌス金貨が付け加えられている（後述）。

その後、羅豊氏が宿白氏の集成表を元に整備拡充した、新たな集成表（以下、〈羅氏表〉と略称）を氏の『固原南郊隋唐墓地』に掲載している²¹⁾。その表には、発掘報告書に掲載された固原南郊郷の史氏一族墓地出土の3枚のビザンチン金貨仿製品のほか、新たに1980年代以降に発見されたビザンチン金貨及びその仿製品を含め34枚の金貨を集成した。更に『中国銭幣』2001年第4期に掲載された康柳碩氏のビザンチン金貨綜述論考の集成表（以下、〈康氏表〉と略称）は、羅豊氏の集成表にさらにその後の資料を付け加え、合計40枚となった²²⁾。氏の論考には巻頭にカラー図版が付けられ、そこに金貨5枚の表裏の写真が公表されているのは、一定の参考となるものである。同誌に同時に掲載されたThierry, F., Morrison, C. 両氏の論考（以下、〈両氏論〉と略称）は省別に纏められ、かつ、ヘディンのコートン購入品と固原における最新の資料を掲載しているが、幾つかの脱落とササン金貨仿製品の混入がある²³⁾。

本稿では、先に紹介した独孤羅夫人賀若氏墓出土のユスティヌス I 世金貨にちなんで、夏鼐・岡崎集成以降、今日まで中国において出土したビザンチン金貨の再集成を試みたい。

本稿の性格からすると、夏鼐・岡崎氏の集成以降から紹介するべきであろう。しかし、これまでに集成されている貨幣についても、多少の補訂が必要と思われるものが散見する。煩を厭わず、多少のコメントを付けておきたい（以下、番号は附表による）。

・ 1～3、新疆和田（コートン）ヘディン採集、仿ビザンチン金貨

1905年、ヘディンの中央アジア探検の際に和田において購入されたもので、後に Montell, G. 氏によって報告されたものである²⁴⁾。早く、岡崎氏によって紹介されてい

²⁵⁾
る。

- 4～6、新疆トウルフアンアスターナ、スタイン発掘、仿ビザンチン金貨
スタインの第三次中央アジア探検の際、1915年、アスターナでの発掘によって発見されたもので、いずれも死者の口中に含ませてあった²⁶⁾。
- 7、甘肅武威康阿達墓出土、ビザンチン金貨
夏鼐氏の独孤羅墓ビザンチン金貨論考⁹⁾の中で、氏が1945年、河西回廊調査の際、甘肅省武威の康阿達墓から金貨が出土したことを知って追跡したが、発見者が銀行で現金と引き換えてしまったことを記している。従って、誰帝の金貨かは不明である。
- 8、陝西咸陽底張湾独孤羅墓出土、ユスティヌスII世（565—578在位）金貨
すでに紹介したように、1953年発見のこの金貨は、1954年北京で開催された「全国出土文物展覧」に出品されて一躍注目を集めた。新中国における東西交渉史研究の出発点となった金貨である⁹⁾。
- 9、陝西西安西郊土門村唐墓出土、仿ヘラクリオス金貨
1956年西安西郊土門村009工地2号墓よりの出土である²⁷⁾。金貨は径2.15糎、重さ4.1瓦、表面には銘文がなく、その代わりにヘラクリオスと息子のコンスタンティヌの並んだ胸像を細粒連接文が取囲む。裏面には3段の壇上に据えられた十字架を中央に、左にクルス、右に星形をちりばめる。周囲の文字列は変形されていて読むことが出来ない。夏鼐氏は詳しく検討を加え、この金貨がヘラクリオス帝の後期、アラブ帝国によって模造されたヘラクリオス金貨と断定した。
- 10、内蒙古フホト市土黙特左旗畢克齊鎮出土、アナスタシウスI世（491—518在位）金貨
1959年、フホト西郊約30軒の土黙特左旗畢克齊鎮水磨から出土した²⁸⁾。直径は1.4糎、重さ2瓦。周縁が削られ、銘文も読み難く、レオI世とされていたが、銘文の再検討によってアナスタシウスI世金貨とされている。
- 11、陝西西安何家村窖藏出土、仿ヘラクリオス金貨
1970年発見の、金銀器物を多量に埋藏した遺構として著名な、西安何家村窖藏中のビザンチン金貨である。この金貨は先の「9、西安土門村唐墓出土、仿ヘラクリオス金貨」と酷似しており、同様にアラブ仿製品とするべきものである²⁹⁾。
- 12、新疆トウルフアンアスターナ92号墓出土、仿ビザンチン金貨
- 13、新疆トウルフアンアスターナ138号墓出土、ビザンチン金貨
2枚同時に発掘簡報に写真、拓本つきで発表され92号墓貨が仿製品、138号墓貨が真物とされた³⁰⁾。12については〈両氏論〉はその集成のNo.8として、上下径2.48糎、左右径17.8糎の仿製品。13はマウリスティベリウス帝（582—602在位）金貨の仿製品とする。簡報の写真と拓本からは容易に読み取れないので、今、それに従う。

附表、中国出土

No.	金貨名称	出土地
1	仿ビザンチン金貨	新疆和田(コータン)
2	"	"
3	"	"
4	仿ビザンチン金貨	新疆トウルフアンアスターナI区3号墓
5	"	" 5号墓
6	"	" 6号墓
7	ビザンチン金貨	甘肅武威康阿達墓
8	ユスティヌスII世金貨	陝西咸陽独孤羅墓
9	仿ヘラクリオス金貨	陝西西安土門村009工地2号墓
10	アナスタシウスI世金貨	内モンゴルフホト近郊土黙特左旗畢克齊鎮
11	仿ヘラクリオス金貨	陝西西安何家村窖藏
12	仿ビザンチン金貨	新疆トウルフアンアスターナ92号墓
13	ビザンチン金貨	" 138号墓
14	テオドシウスII世金貨	河北贊皇李希宗墓1号貨
15	ユスティヌス・ユスティニアヌス金貨	" 2号貨
16	"	" 3号貨
17	仿ビザンチン金貨	新疆トウルフアンアスターナ191号墓
18	"	" 150号墓
19	"	"
20	"	"
21	"	新疆トウルフアン地区
22	アナスタシウスI世金貨	河北磁県茹茹公主墓1号貨
23	ユスティヌスI世金貨	" 2号貨
24	ユスティヌス・ユスティニアヌス金貨	河北磁県閻氏墓
25	アナスタシウスI世金貨	内モンゴウ武川県烏蘭不浪郷
26	フォカス金貨	河南洛陽龍門安菩墓
27	仿ビザンチン金貨	寧夏固原南郊史道德墓
28	"	" 史索岩墓
29	"	" 史訶耽墓
30	仿アナスタシウス金貨	陝西西安東郊堡子村唐墓
31	ヘラクリオス金貨	遼寧朝陽双塔区3号唐墓
32	フォカス金貨	甘肅天水清水県唐墓
33	ユスティヌスI世金貨	陝西咸陽飛行場工地賀若氏墓
34	テオドシウスII世金貨	陝西商州市3号隋墓
35	アナスタシウスI世金貨	陝西西安西郊西安飛行場付近168号金貨
36	"	陝西西安南郊西何家村130号金貨
37	"	陝西西安東郊徵収30号金貨
38	仿ビザンチン金貨	新疆トウルフアンカラホジョ105号墓
39	レオI世金貨	浙江杭州(外地流入)
40	フォカス金貨	中国銭幣博物館徴収
41	テオドシウスII世金貨	甘肅隴西県城内
42	仿ビザンチン金貨	新疆トウルフアン采坎3号墓
43	ユスティヌスII世金貨	寧夏固原南郊史道德墓
44	レオI世金貨	寧夏固原南郊田弘墓1号貨
45	ユスティヌスI世金貨	" 2号貨
46	ユスティヌス・ユスティニアヌス金貨	" 3号墓
47	"	" 4号貨
48	ユスティニアヌスI世金貨	" 5号貨
49	アナスタシウスI世金貨	寧夏固原県
50	ゼノ金貨	陝西定辺県安辺鎮
51	ユスティニアヌスI世金貨	青海烏蘭県銅普大南湾祭祀遺址
52	テオドシウスII世金貨	青海都蘭県香日徳鎮溝里郷牧草村吐谷渾墓

注) 表の配列は比較の便宜のため、羅氏・康氏の表の配列を踏襲した。個数はすべて1枚である。

ビザンチン金貨表

出土年	文 献	そ の 他
1905	ヘディン採集、注24) PL. VII.	吊環
"	"	
"	"	
1915	スタイン発掘、注26) Vol. III, PL. CXX.	口中
"	"	"
"	"	"
1945	夏竦考古調査、注9)	銀行へ売却
1953	<学報>1959-3, p. 67-74、図版1-1~4.	1孔
1956	<考古>1961-8, p. 446-447、図版8-5~8.	
1959	<考古>1975-3, p. 182-185、図版8-1~1.	
1970	<文物>1972-1, p. 36、図9・10.	
1967	<文物>1972-1, p. 11、図6・7-左.	
1969	"、図6・7-右.	
1976	<考古>1977-6, p. 388、図版6-1~3.	2孔(上に)
"	"	
"	"	
1973	『新疆出土文物』194図左上	1孔
1972	" 194図右上	1孔
	" 194図左下	1孔
	" 194図右下	1孔
	『新疆文物古迹大観』0354図-下	
1978-9	<文物>1984-4, p. 7、図9・11-1・3.	
"	"、図10・11-2・4.	
1978	上記の貨幣、省くべし	
1980	<内蒙古金融>1987-8(未見)	
1981	<中原文物>1982-3, p. 25、図版7-2・3.	右手に握る
1982	『固原南郊隋唐墓地』p. 151、図73・74.	口中、1孔
1985	"、図28、彩版16.	1孔、片面範
1986	"、図48、彩版17.	2孔、片面範
1989	<考与文>1992-5, p. 56.	片面範
1992	<文物>1997-11, p. 54、図6・7.	1孔(下方に)
1990	<甘肅錢幣專輯>1991(未見)	
1988	<考与文>1993-6, p. 51、図5-1・2.	2孔(左右に)口中
1993	<考与文>1997-4, p. 7、図5.	1孔、口中か
1979	<文博>1991-1, p. 38、図1-2.	1孔(破損)
1966	"、図1-1.	
1979	"、図1-3.	
1975	<新疆錢幣>1991年(未見)	先述21-Bのもの
1994	<中国錢幣>1995-1, p. 36、写真・拓本.	
	未発表	
1998	<考古>2001-12, p. 88、図1・2.	
1976	<新疆文物>1990-3, p. 5、図版4-左下.	
1995	『唐史道洛墓』p. 202, PL. 25. 上段、挿図69.	2孔(上下に)
1996	『北周田弘墓』p. 171, PL. 29-1/6.	2孔(更に+2孔?)
"	" p. 171, PL. 29-2/7.	3孔(三角に)
"	" p. 171, PL. 29-3/8.	4孔(左右に各2)
"	" p. 171, PL. 29-4/9.	3孔(逆三角に)
"	" p. 171, PL. 29-5/10.	口中であろう
1998	<中国錢幣>2000-1, p. 58.	
1998	<中国錢幣>2000-2, p. 44、"2001-4, p. 15-18.	1孔(下に)、上に小環
2000	<中国錢幣>2001-4, p. 40.	
2002	<中国文物報>2002年7月24日	1孔

※<>は雑誌類、「』は図書、<学報>=『考古学報』、<考与文>=『考古与文物』。

ところで、『新疆文物』の2000年3・4合併号には新中国による発掘の開始から、1973年までのアスターナとカラホジョ古墓群墓葬登記表（以下、〈魯氏表〉と略称³¹⁾）が掲載されている。ところが、それによると、67TAM92と69TAM138には、共に金貨ではなく銀貨と記録されている。同表には長年の間の欠落部分も多い。どちらが正しいのか、ともかく、判明した事柄を記載しておくこととする。

- 14、河北賛皇李希宗墓1号貨、テオドシウスII世（408—450在位）金貨
- 15、 " 2号貨、ユスティヌス・ユスティニアヌス（527）金貨
- 16、 " 3号貨、 "

1976年、河北省賛皇県南邢郭村東南の東魏李希宗墓から出土した。墓誌から李希宗（武定二年<544>葬）と妻崔幼姫（北齊武平七年<576>葬）の夫婦合葬である。金貨3枚は、いずれも西側の夫人の棺から出た³²⁾。1号貨は、径2.1糎、3.6瓦、テオドシウスII世金貨である。二孔がある。2号貨は径1.68糎、2.49瓦。3号貨は径1.7糎、2.6瓦。周縁が銘文ぎりぎりまで削られている。両貨はともにユスティヌス・ユスティニアヌス金貨で、2号貨が二人並ぶのみであるのに対し、3号貨は玉座に並んで座るところが異なる。

- 17~20、新疆トウルフアンアスターナ出土、仿ビザンチン金貨

1973年アスターナ出土ビザンチン金貨として『新疆出土文物』194図に4枚まとめて掲載された金貨である³³⁾。図録には大きさが径1.5~1.7糎と記されるほか詳細な記述は無い。そのうち、左上のもの（=17とする）と右上のもの（=18）の2枚が2002年東京と大阪で開催された「シルクロード——絹と黄金の道展」に出品された³⁴⁾。そのリストによって、17が1973年発掘の191号墓出土金貨（注一34）、139図左）、18が1972年発掘の150号墓出土金貨（注一34）、139図右）と確定できた。共に1孔がある。また、18の写真が『新疆文物古迹大観』に掲載されている³⁵⁾。

『新疆出土文物』194図の左下（=19）と右下（=20）は共に、出土墓号等の詳細は不明である。19は二人の胸像を並べる。20は平らで中央に像がありそうだが、写真が小さく、判明しない。共に1孔がある。

- 21、新疆トウルフアン地区出土、仿ビザンチン金貨

トウルフアン地区出土の金貨として、もう1枚、上記『新疆文物古迹大観』に掲載された金貨がある³⁶⁾。甲冑姿の胸像をあらわし、周囲に連点を回らす仿ビザンチン金貨である。これも出土の詳細は明らかでない。

この機会に、アスターナとカラホジョ発掘貨幣について検討を試みたい。

- A、先述の〈両氏論〉はNo.10として、1972年アスターナ188号墓出土のビザンチン金貨をあげている。報告は『文物』誌に発表されたもので、女性の口中にビザンチン金貨仿製品が1枚含まれていた。出土の墓誌から開元三年（715）張公夫人麴娘のもの³⁷⁾

は如何したことであろうか。墓誌蓋、墓誌の第一行とも「茹茹公主閻氏」とある。閻氏とは柔然主の姓の郁久閻氏のことなのである。貨幣名称が異なるが、筆者は先の茹茹公主墓貨幣との重複と判断し、表から削除することを提案したい。

• 25、内蒙古武川県烏蘭不浪郷発見、アナスタシウス I 世（491—518在位）金貨

発見地はフホト市の北、陰山山脈中である。筆者は原報告³⁹⁾を未入手であるため、前出、〈両氏論〉によって紹介する。〈両氏論〉のNo.13によると、1984年の発見で、金貨は径1.2糎、2.3瓦、銘文からアナスタシウス I 世のもので、周囲が削られたソリドス貨と記述される。

• 26、河南洛陽龍門安菩墓出土、フォカス（602—610在位）金貨

1981年、河南省洛陽市南郊の龍門東山北麓の景龍三年（709）安菩夫妻墓から出土した⁴⁰⁾。安菩は昭武九姓の一つ安氏の大首領である。金貨は径2.2糎、4.3瓦、安菩の右手に握られていた。表面はフォカスの胸像で、尖った顎に長い顎鬚を持つ。裏面は正面向きのヴィクトリ女神である。写真は報告の図版のほか、前出、康氏論考²²⁾の巻頭カラー図の図5にも掲載されているが、いずれも鮮明さを欠く。

• 27、寧夏固原南郊史道德墓出土、仿ビザンチン金貨

• 28、 " 史索岩墓出土、 "

• 29、 " 史訶耽墓出土、 "

寧夏回族自治区の南辺、固原南郊郷にある史氏一族墓地からの出土である。史道德墓が先に報告され⁴¹⁾、その後、同墓を併せ正報告書が刊行された⁴²⁾。報告書は東羅馬金貨的仿製品の節でそれら金貨を考察している⁴³⁾。史氏も昭武九姓の一つである。

27、史道德墓（儀鳳三年（678）埋葬）出土、仿ビザンチン金貨—径2糎、4瓦、墓主の口中より発見された。ゼノ帝（474—475、476—491在位）と見られる胸像は表裏とも鮮明さを欠き、銘文のラテン文字も字体が粗雑で、ゼノ帝金貨の仿製品とされている。佩用のための小孔が一つ開いている。

28、史索岩墓（麟徳元年（664）埋葬）出土、仿ビザンチン金貨—1985年発掘の史索岩墓出土貨で、径1.9糎、0.85瓦。薄く軽く、胸像のみの片面范である。斜め右上に佩用のための小孔が一つ開けられている。銘文も読み難い。

29、史訶耽墓（咸亨元年（670）埋葬）出土、仿ビザンチン金貨—1986年発掘の史訶耽墓出土貨で、径2.3糎、2瓦。表面のみ打ち出されている。上下に2孔、佩用の小孔がある。この金貨は1992年、広島市ほかで開催された「大黄河・オールドス秘宝展——中国・寧夏古代美術の粹」⁴⁴⁾に出品された。

• 30、陝西西安東郊堡子村唐墓出土、仿アナスタシウス金貨

1989年、西安市東郊堡子村の初唐墓から出土した⁴⁵⁾。金貨は径2.1糎、0.8瓦、表面のみに胸像を打ち出している。周囲の銘文がアナスタシウスと読め、その仿製品である。

又、羅豊氏の論考⁴⁶⁾があり、この金貨を仿製品とする。この金貨は1992年、セゾン美術館ほかで開催された「シルクロードの都、長安の秘宝展」⁴⁷⁾に出品された。

• 31、遼寧朝陽唐墓出土、ヘラクリオス（610—641在位）金貨

1992年、遼寧省朝陽市双塔区3号唐墓（初唐～盛唐）から出土した金貨で、径2糎、4.4瓦⁴⁸⁾ある。表面はヘラクリオスとコンスタンチヌが並んだ胸像、裏面は三段の壇上に立てられた十字架である。表面の銘文は読み難いが、この金貨がヘラクリオスのソリドス金貨である事は間違いない。下方に佩用のためのかなり大きな孔が1個開けられている。

• 32、甘肅天水清水県唐墓出土、フォカス（602—610在位）金貨

1990年、甘肅省天水市清水県唐墓出土と報告された。径2.1糎、4.4瓦。金貨を実見した康氏によると、26安菩墓と同じフォカス金貨である。裏面は拓本が濃すぎて図像は明確ではないが、正面向きの女神像である。表面の銘文は δNFOCA / SPER-PAVC であろう。

• 33、陝西咸陽飛行場工地賀若氏墓出土、ユスティヌス I 世（518—527在位）金貨

すでに第二章の賀若氏墓の記述中に紹介したのでここでは省略する。

• 34、陝西商州市3号隋墓出土、テオドシウス II 世（402—450在位）金貨

関中から東北へ、秦嶺山脈を越えた南に商州市は位置する。金貨は径1.8糎、2.8瓦、発掘された3基の隋墓のうち3号墓から出土した⁵⁰⁾。これまで出土したビザンチン金貨のうち、最も南からの発見である。表面は甲冑を付け右肩に槍、左肩に盾をもった皇帝の胸像である。周縁を叩き延ばしたため、銘文は消えた部分が多い。裏面は中央に左向きの女神が立ち、右手に十字架杖、左手に勝利の女神が載った地球を持つ筈であるが、明瞭でない。銘文は一部、HAHT が読める、と発掘簡報にあるが、コインカタログをみても該当する銘文がない⁵¹⁾。一応、テオドシウス II 世金貨とするが、仿製品かもしれぬ。1孔がある。

• 35、陝西西安西郊労働南路出土、アナスタシウス I 世（491—518在位）金貨

• 36、陝西西安南郊西何家村出土、アナスタシウス I 世金貨

• 37、陝西西安東郊金属回収公司徴収、アナスタシウス I 世金貨

以上3枚の金貨は『文博』誌に併せて報告された⁵²⁾。35は報告の図1—2、168号金貨で、1979年に出土した。前出、康氏論考²²⁾の巻頭図版に表裏のカラー写真が掲載されており、その裏面に朱墨で168の数字が書かれていて、この金貨である事は誤りない。さらに、この金貨は先述の「大唐王朝の華——都・長安の女性たち展」に出品され、表面のみ明瞭な印刷で見ることが出来る。但し、解説にこの金貨を西安堡子村出土とするのは誤りである⁵³⁾。表面は甲冑を着用し、右肩に槍、左肩に盾を構えた胸像で、銘文は DNANASTA / SIVSPPAVI。裏面は左羽を見せて立つ女神が右手に十字架

杖をつく。銘文は VICTORI AAVCCCA それに CONO であって、この金貨がアナスタシウス I 世のものと知られる。

36は報告の図 1—1、130号金貨である。1966年に出土した。表面図像は35と同一で、銘文は DNANASTA / SIVSPPAVC と読める。裏面の銘文も上記に同じく、アナスタシウス I 世金貨と出来るが、裏面の女神が正面向きなのはユスティヌス I 世風である。

37は報告の図 1—3、30号金貨で、1979年に西安東郊の金属回収所から選び出された。この金貨も前出、康氏論考²²⁾の巻頭図版に表裏のカラー写真が掲載されており、その裏面に朱墨で30の数字がある。また、先述の「大唐王朝の華——都・長安の女性たち展」、さらに1992年の「正倉院の故郷——中国の金銀ガラス展」にも出品され、表裏とも明瞭な印刷で見ることが出来る⁵⁴⁾。但し、解説にこの金貨をテオドシウス金貨とするのは誤りである。表面の銘文は DNANASTA / SIVSPPAVC。裏面は VICTORI AAVCCCV それに CONO であって、この金貨もアナスタシウス I 世金貨である。

• 38、新疆トウルフアンカラホジョ105号墓出土、仿ビザンチン金貨

先に21のBに記したものがそれであるが、筆者は出典の『新疆銭幣』⁵⁵⁾を見ていない。前出、〈康氏表〉によると、備考欄に径1.7糎、重さ0.4瓦とし、さらに単片と記している。重さから考えても片面范の打ち出し仿製貨幣であることは誤り無い。

• 39、浙江杭州（外地流入）、レオ I 世（457-474在位）金貨

1994年に浙江省杭州にあらわれたもので外地からの流入とある。外地が中国内か、外国かで大きく意味は異なるが、一応中国内のどこからということではリストに残す。最初に紹介したのは前出、康氏²²⁾で、写真（同氏論考の図—2）と併せ径1.74糎、重さ2.8瓦の法量を示す。屠燕治氏はさらに詳しく紹介し、併せて金貨のカラー写真を掲載している⁵⁶⁾。拓本やカラー写真から見る限り、周縁を切り取られているが、間違いなくレオ I 世金貨である。但し、屠氏の銘文の読み方は訂正が必要で、表面は DNLEOPE / RPETAVC、裏面は VICTORI と AAVCCC それと CON である。

• 40、中国銭幣博物館徴収、フォカス（602-610在位）金貨

これも前出、〈康氏表〉に載せられたものであるが、未発表ではいかんともし難い。果たして中国内出土品か否かも不明である。

• 41、甘肅隴西県発見、テオドシウス II 世（402-450在位）金貨

1998年、報告者が甘肅省隴西県の農民から入手した金貨である⁵⁷⁾。径1.8糎、2.3瓦、周縁が削られ、表裏の文様に一部摩滅があるが、康柳碩氏によって文様及び銘文からテオドシウス II 世金貨と鑑定されている。

• 42、新疆トウルフアン采坎3号墓出土、仿ビザンチン金貨

新疆ウイグル自治区トウルフアン五星郷采坎において、1976年、五基の墓を発掘調査し、76TCM1～5と命名した。⁵⁸⁾ そのうち、ビザンチン金貨を出土したのは3号墓とある。だが、付載の出土器物一覧表には、1号墓の金器の欄に仿羅馬金貨—1とあり、3号墓の欄には記載がない。また、本文の金器の項に、仿羅馬金貨が2点とある。あるいはもう1枚金貨があるのかもしれない。金貨は径1.7糎、重さは記載がない。掲載の図版は印刷が不鮮明で詳細を明らかにし難い。

• 43、寧夏固原南郊郷唐史道洛墓出土、ユスティヌスII世（565—578在位）金貨

原州連合考古隊の発掘調査で、1995年に寧夏回族自治区固原県南郊郷の史道洛と妻康氏の墓の攪乱土から出土した。⁵⁹⁾ 墓は顯慶三年（658）の築造である。径2.0糎、重さは記載がない。刊行された報告書の図版25にカラー写真が掲載されているが、径2糎の孔が上下に開けられ、表裏とも周縁部が叩き伸ばされて銘文はほとんど読めない。ユスティヌスII世金貨と報告されているが、それは裏面の女神像が腰を掛け、両足を開いた形にあらわされる特徴から定めたものであろう。この女神をアポロ神の立像、とする報告書の記載は誤りで、女神の倚坐像である。表面の銘文のDNIVSTINVSの部分は図版写真からは判明しない。右側のPPAVC（GをCと訂正）は読める。裏面も写真からは左のVICTORIと下方のCON...は読み難い。右方はAVCCCH（GをCと訂正）である。

• 44、寧夏固原西郊郷大堡村北周田弘墓出土1号貨、レオI世（457—474在位）金貨

- 45、 " 2号貨、ユスティヌスI世（518—527在位）金貨
- 46、 " 3号貨、ユスティヌス、ユスティニアヌス（527）金貨
- 47、 " 4号貨、 "
- 48、 " 5号貨、ユスティニアヌスI世（527—565在位）金貨

以上の5枚はいずれも、1996年に行なわれた原州連合考古隊⁶⁰⁾の発掘によって、寧夏固原県西郊郷大堡村の北周建徳四年（575）田弘墓から出土した。一墓から5枚も金貨が出土したことは初めてである。

44の1号金貨は1.54糎、2.6瓦。田弘棺の内棺内左腰付近から発見された。報告では2孔がある、とされるが、図版では径1.5糎ほどの孔が胸像顔面左右に開けられているほかに、その外側に小さい孔が2孔あるように見えるが、印刷の所為であろうか。周辺が削られ、表面、胸像の顔面が押しつぶされているが、銘文や裏面、女神像などはまさしくレオI世金貨である。表面の銘文はDNLEOPE/RPETAV□で、最後はCか。裏面は左がVICTORI、右がAAVCCCI、下方にCONO□である。

45の2号金貨は1.67糎、2.9瓦。田弘棺の内棺左肩付近から発見された。三角形に3孔がある。表面は右肩に槍を担ぎ左肩を盾で覆う甲冑姿の皇帝胸像である。銘文は左のDNIVSTIはよめるが、右側は銘文がすっかり削られている。裏面は左半身の

女神立像で右手に十字付きの長い杖を握り、左の羽を見せる。銘文は左が VICTORI、右が AAVCCCI、下は CONOB である。銘文からユスティヌス I 世金貨であるが、裏面はなお、前代のアナスタシウス I 世金貨裏面と同じ姿の女神像である。

46の3号金貨は1.62糶、2.6瓦。田弘棺の内棺頭部右側から発見された。左右に並んで2孔ずつがある。ユスティヌス、ユスティニアヌス共同統治時の金貨である。表面は並んで座る周囲を玉座の手摺や背もたれが取囲む。上方が削られて一部分読み難いが銘は DNIVSTINETIVSTINIANVSPPAVC、玉座下方に CONOB と読むべきであろう。裏面は正面向きの女神の立像で、右手に杖、左手は十字架飾の地球である。銘文は左が VICTORI、右が AAVCCCI、下方が CONOB である。

47の4号金貨は1.62糶、3.3瓦。田弘棺の棺蓋上にあった。逆三角形に3孔がある。3号金貨と同じユスティヌス、ユスティニアヌス共同統治時の金貨で、表面の図像は3号金貨と同一で、銘文は右下が削られているが (DNIVS) TINETIVSTINIANPPAVC と読める。裏面も3号金貨と同様で、銘文は左方と下方が同じく、右方だけ AAVCCCS となる。

48の5号金貨は第五天井人骨の頭蓋骨内から発見された。口中に入れたものであろう。これのみ孔がない。報告に寸法、重量の記載がない。周縁をかなり削られ、特に裏面では女神の顔面が半ば削られ、左方の銘文 VICTORI も無い。しかし、表面の銘文 DNIVSTINI / ANVSPPAVI それに裏面右と下の AAVCCCA CONOB は明瞭で、ユスティニアヌス I 世の金貨である。

• 49、寧夏固原県、アナスタシウス I 世 (491—518在位) 金貨

1998年、固原県の畑から発見された金貨で、黄釉磁器の扁壺残片が伴った。⁶¹⁾ 径は1.76糶、重さ3.1瓦、周縁は切り取られているが、図像や銘文は胸像顔面を除いて鮮明である。表面は右肩に槍、左手に盾の武装胸像で、銘文は DNANASTA / SIVSPPAVC である。裏面は左羽根を見せる女神像。銘文は左が VICTORI、右が AAVCCCI、下に CONOB である。アナスタシウス I 世金貨である。

• 50、陝西定辺県安辺鎮、ゼノ (474—475、476—491在位) 金貨

1998年に紹介者の李生程氏が陝西省定辺県安辺鎮の農民から入手した。⁶²⁾ 径は1.74糶、重さ3.25瓦、下方に1孔と上方に小鑲が取り付けられている。鑲は李氏が入手する以前から付いていた。この金貨も印刷が不鮮明で検討が困難であるが、その後、専論が発表され、それによってゼノ金貨である、とされた。その論考では、表面の銘文を⁶³⁾ DNZENO / PERPAVC と読み、この金貨をゼノ金貨とする。銘文から見てゼノの第二次統治時期であろう。中国境内で、ゼノ金貨の発見は初めてのことである。裏面の銘文は左に VICTORI、右に AAVCCC、下方が CONOB である。

• 51、青海烏蘭県銅普大南湾祭祀遺址出土、ユスティニアヌス I 世 (527—565在位) 金

貨

2000年、青海省烏蘭県銅普大南湾の祭祀遺跡から出土した⁶⁴⁾。他に灰陶片や牛・羊骨が出土したところから、祭祀遺跡とされる。径1.2糎、重さは記載がない。報告文の掲載誌巻頭にカラー図版があり、金貨は周縁がかなり削られ、特に表面の左の銘文が削り取られている。胸像は左肩を盾で覆うが、右手は槍ではなく十字架を載せた地球を捧げる。右側の銘文は / ANVSPPAVθ であろう。裏面は有翼の女神の立像で、正面を向きながら右足を僅か踏み出す特徴を示す。右手は十字架杖を、左手に十字架を載せた地球を持つ。銘文は左側が削られて読めない。右は AAVCCC で最後は E であろう。下方の製作地名も削られている。この金貨であるが、右手に槍ではなく、十字架を載せた地球を持つ皇帝は何人かいるが、銘文の右側に ANVS が来るのは IV-STINI / ANVS のみであって、裏面の女神の姿と併せ、ユスティニアヌス I 世金貨と定めることが出来た。〔付記〕

- 52、青海都蘭県香日徳鎮溝里郷牧草村吐谷渾墓出土、テオドシウス II 世（402-450在位）金貨

最も新しい発見品で、2002年5月、青海省シッタム盆地の都蘭県香日徳鎮の東3料、溝里郷牧草村の吐谷渾墓から出土した⁶⁵⁾。径1.45糎、2.36瓦、周縁は削られ、上部に1孔がある。表面は甲冑をまとい、右肩に槍、左肩に盾を構える皇帝の胸像をあらわす。銘文は DNTHEODO / SIVSPFAVC と読める。裏面は写真が不鮮明であるが、中央は女神の立像である。丁度顔面に孔が開けられているが、右手に長い杖をつき、左へ歩み出す姿であろう。背後の縦長の曲線は左羽根であろう。報道記事では裏面左側の銘文を VOTXX と読み、右側を MVLTXXX と読んでいる。テオドシウス II 世金貨の大部分の裏面は、右手に杖、左手に勝利の女神を載せた地球を支える女神であって、本金貨のように、左手に何も持たず、左羽を見せる金貨は少数である⁶⁶⁾。恐らく報道記事の筆者は、「14、李希宗墓1号テオドシウス II 世金貨」の夏鼐氏による裏面銘文を丸写ししたものであろう³²⁾。しかし、筆者には裏面の銘文は、左が VICTORI、右が AAVCCCI と読める。下方は CONOB でよい。このようなテオドシウス II 世金貨も、あっていいのではなからうか。

五、むすび

1、独孤信とその後裔たち

はじめに述べたように、本稿作成のきっかけは2002年夏、陝西歴史博物館で実見した独孤信石炭製多面体印である。関中ではなく秦嶺山脈を南に越えた旬陽県の、しかも明代建物跡からの出土であって、問題が残る。しかし、本稿では真贋はさておき、前稿に

続いて再び独孤信の一族を取り上げる導入とした。これまで独孤信の一族であって、墓誌等が発見され、それによって『周書』、『北史』、『隋書』の記載が裏付けられ、或いは新たに史書の欠を補うことが出来たものは、かなりの数に上る。ここに、筆者の前稿以降公表された新たな出土資料を集めて、独孤信の後裔たちの事迹を検討した。

独孤信の息子たちのうち、次（又は三）男独孤蔵の墓の発掘報告書が刊行され、独孤氏一族のうちで唯一、未盗掘の墓の構造や副葬品の出土状況が明らかにされた。これまで墓誌のみが知られていた、独孤信をはじめとする一族の、墓の様相を推察することが可能となった。報告書の図面を転載したのはそのためである。また、嫡男の善の曾孫娘、独孤夫人の墓誌考証によって、善の一族の新たな家系が明らかとなった。

今回、独孤羅夫人賀若氏の墓の発見は最も興味深い。先にその生涯を考証してきた独孤羅の夫人のことが明らかとなった以上に、金銀珠玉を散りばめた豪華な装身具の出土は、唐代高級貴族女性の服飾研究に大きく資するものである。簡報の形でなく、墓誌も含めた詳細な発掘報告書の刊行を期待したい。まだ墓誌の詳細が明らかではないが、これまで不明であった、羅の嫡男纂と次男武都を生んだ正夫人として、賀若氏を当てておきたい。

2、近年新出土のビザンチン金貨

独孤信の石炭製多面体印をきっかけに本稿を草したもう一つの狙いは、言うまでもなく、賀若氏墓から出土したビザンチン金貨を巡る問題である。かねてから温めていたシルクロードへの関心を、この機会に一部吐露したのが、本稿のもう一主題のビザンチン金貨の集成である。近年、次々に行なわれた唐代を主題とした展覧会において、幾つかのビザンチン金貨の実物を見る機会があった。また、様々な文献や資料の公表もあって、これまで不十分な印刷でしか検討の出来なかった金貨を、やや詳しく検討することが出来たのは幸いである。それらの論考や報告に当たられた先人たちに、深甚の敬意を表したい。それら先人のお陰で、ここに50枚を越える多量の中国出土ビザンチン金貨表を作成することが出来た。とはいえ、研究は厳密でなければならぬ。敢えて非礼とは承知しながら、自らの見解によって、本稿を草した部分については、筆者自らが責任を負うものである。ビザンチン金貨をめぐる様々な問題については、言及すべき課題が多くある。本稿はとりあえず、集成までとして、それらの問題については別稿に譲ることとしたことを御詫びし、本稿を閉じることとしたい。改めて、先学諸氏のご叱正を願うものである。

本稿の作成にあたり、本学の畏友辻成史氏には貴重なビザンチン金貨カタログ類を貸与賜り、激励頂いた。そのお陰によって、ようやくビザンチン金貨の同定に取り組むこ

とが出来たことを御礼申し上げるものである。また、京大人文学研究所の岡村秀典氏にも貴重な文献資料の閲読にご便宜を頂いた。『河北省出土文物選集』は鄭紹宗氏から寄贈頂いた。『中国錢幣』誌の閲覧を御許し頂いた黒川古文化研究所の皆様と併せ、厚く御礼申し述べるものである。掲載した付図や付表の作成には、本学大学院生赤松和佳さん、大学院研究生の橋本明子さんの助力を得たことも記しておきたい。

(03.01.21稿)

参考図書——先学の研究論考のほか、金貨の同定には下記の参考図書に負う。

Whitting, P. D., *Byzantine Coins*, London, 1973.

Grierson, P., Mays, M., *CATALOGUE of LATE ROMAN COINS in the Dumbarton Oaks Collection and in the Whittemore Collection*, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D. C.

Wroth, W., *Catalogue of the IMPERIAL BYZANTINE COINS in the British Museum*, Volume 1. London, 1908.

注釈

- 1) 秋山進午「独孤信墓誌と独孤開遠墓誌」『論苑 考古学——坪井清足氏古希記念論集』天山舎、1993年、817-840頁。
- 2) 岡崎敬「隋趙国公独孤羅の墓誌銘の考証—陝西省咸陽・底張湾の北周・隋唐墓」『史淵』第八十三輯、1960年、(岡崎敬『中国の考古学——隋唐篇』同朋舎、1987年所収、73-100頁。)
- 3) 旬陽県博物館「旬陽出土の独孤信多面体煤精組印」『文博』1985年第2期、95-96頁。
- 4) 『周書』卷十六、独孤信伝。
『北史』卷六十一、独孤信伝。
- 5) 北朝史とその中における武川鎮軍閥集団については次の研究書を参考とした。
宮崎市定『隋の煬帝』(『中国人物叢書』4)人物往来社、1965年。
谷川道雄『隋唐帝国形成史論』筑摩書房、1971年。
内田吟風『北アジア史研究——匈奴編』(『東洋史研究叢刊』28-1)同朋舎、1975年。
- 6) 史樹青「新疆文物調査随筆」『文物』1960年第6期、22-31頁。印のカラー写真は『シルクロード——絹と黄金の道展』図録、135図、東京国立博物館・NHK、2002年。
- 7) 祁守華「我国出土的煤精制品述略」『文博』1986年第6期、68-72頁。なお、『文博』1988年第6期、37頁に張沛「陝西旬陽出土漢代煤精獅」の追加がある。
- 8) 近年刊行された甘肅省文物考古研究所『敦煌祁家湾——西晋十六国墓葬發掘報告』文物出版社、1994年や青海省文物考古研究所『上孫家寨漢晋墓』文物出版社、1993年、にも石炭製品があるが、いずれも小型の装飾品などである。
- 9) 夏鼐「咸陽底張湾隋墓出土的東羅馬金幣」『考古学報』1959年第3期、67-74頁。(夏鼐『考古学論文集』科学出版社、1961年所収、135-142頁。)
- 10) 陳志強「咸陽底張湾隋墓出土拜占廷金幣の兩個問題」『考古』1996年第6期、78-81頁。
- 11) 貝安志「陝西長安県南里王村与咸陽飛機場出土大量隋唐珍奇文物」『考古与文物』1993年第6期、45-52頁。なお、賀若氏の「名は厥」と報告されるが、夫人墓誌に名が記される例は数少ない。墓誌全文が明らかになるまでは保留し、賀若氏と記述する。
- 12) 陝西歴史博物館『唐墓壁画真品選粹』陝西人民美術出版社、1991年、にも位置のみしか記

- されていない。
- 13) 『大唐王朝の華——都・長安の女性たち展』図録、兵庫県立歴史博物館、1996年、ビザンチン金貨は1—6図、装身具は68・72・81・85図。なお、そのうち、耳飾と櫛のカラー写真が『考古与文物』1998年第5期、表紙裏に発表されているが、その解説には櫛の歯が象牙製と記され、報告の木製とは異なっている。
 - 14) 姚薇元『北朝胡姓考』中華書局、1962年、87頁、は『元和姓纂』三十八箇賀蘭氏の条の「代居₂元朔₁、随₂魏南遷₂河洛₁。魏以₂忠貞₁為₂賀蘭₁、因命₂以氏₁。孝文時、代人咸改₂单姓₁、唯賀蘭氏不₂改。」を引き、更に、この条の賀蘭氏が賀若氏の誤りであることを考証している。
 - 15) 員安志編『中国北周珍奇文物』陝西人民美術出版社、1992年、76-93頁。
 - 16) 《中国文物精華》編輯委員会編『中国文物精華 1997』文物出版社、1997年、図版11。
 - 17) 馬先登・李朝陽「唐独孤夫人墓誌考釈」『文博』1996年第6期、70-72頁。
 - 18) 周紹良「唐誌叢識」『文博』1987年第5期、32-38頁。
 - 19) 王仲殊・王世民「夏竦先生对絲路貨幣研究的貢獻」『中国錢幣』2001年第4期、29頁。
 - 20) 宿白「中国境内発現的東羅馬遺物」『中国大百科全書 考古学』中国大百科全書出版社、1986年、676-677頁。なお、付図の金貨拓本は、1が独孤羅墓貨、2が李希宗墓1号貨、3は欠番で、4が同2号貨、5が同3号貨である。
 - 21) 羅豊『固原南郊隋唐墓地』文物出版社、1996年。貨幣集成表は同書154頁、表二。
 - 22) 康柳碩「中国境内出土発現的拜占庭金幣綜述」『中国錢幣』2001年第4期、3-9頁。
 - 23) Thierry, F., Morrison, C., 郁軍訳「簡述在中国発現的拜占庭帝国金幣及其仿制品」『中国錢幣』2001年第4期、10-13頁。
 - 24) Montell, G., SVEN HEDIN'S ARCHAEOLOGICAL COLLECTIONS FROM KHOTAN, *BMFEA*, No. X, 1938, text pp. 83-113. PL. VII-5 / 7 / 8.
 - 25) 岡崎敬「25 絲綢之路のかなた——中国、ササン、ペルシア、東ローマ帝国、中央アジア諸国——」岡崎敬『増補東西交渉の考古学』平凡社、1980年、487-516頁。
なお、前出、注20)文献、宿白氏表には1914年和田発見のユスティヌスI世金貨を。また、前出、注23)文献、〈両氏論〉には1897年新疆和田発見、コンスタンティヌスV世金貨を挙げているが、筆者は共に未検討であるため、付表から省いたことをお断りする。
 - 26) Stein, A., *Inner Most Asia*, London, 1928, text Vol. II, pp. 642-650, PL. Vol. III, CXX-15-17.
 - 27) 夏竦「西安土門村唐墓出土的拜占廷式金幣」『考古』1961年第8期、446-447頁。
 - 28) 内蒙古文物工作隊・内蒙古博物館「呼和浩特市付近出土の外国金銀幣」『考古』1975年第3期、182-185頁。出土金貨のカラー写真が、前出、注22)文献、巻頭図版、図-1にある。後出、注60)文献、234頁にアナスタシウスI世金貨と考証するのに従う。
 - 29) 陝西省博物館・文管会革委会写作小組「西安南郊何家村発現唐代窖藏文物」『文物』1972年第1期、30-42頁。写真が『文化大革命期間出土文物』第一輯、文物出版社、1972年、69頁に掲載（但し、表面写真は天地逆）。
 - 30) 新疆維吾爾自治区博物館「吐魯番県阿斯塔那——哈拉和卓古墓群清理簡報」『文物』1972年第1期、8-29頁。
 - 31) 魯礼鵬「吐魯番阿斯塔那古墓群発掘墓葬登記表」『新疆文物』2000年3・4合刊、215-243頁。なお、同登記表は阿斯塔那となっているが、その後ろに哈拉和卓の登記表も附載されている。
 - 32) 石家庄地区革委会文化局文物発掘組「河北贊皇東魏李希宗墓」『考古』1977年第6期、382-390頁。夏竦「贊皇李希宗墓出土的拜占廷金幣」同、403-406頁。なお、出土金貨3枚はいずれも、河北省博物館・文物管理处『河北省出土文物選集』文物出版社、1980年、図版

309にかなり鮮明な印刷がある。

- 33) 新疆維吾爾自治区博物館『新疆出土文物』文物出版社、1975年、194図。
- 34) 前出、注6) 東京国立博物館・NHK『シルクロード——絹と黄金の道展』図録、2002年、139図。
- 35) 新疆維吾爾自治区文物事業管理局等編『新疆文物古迹大観』新疆美術攝影出版社、1999年、142頁、0354図—上(但し、印刷は横向きとなる)。
- 36) 前出、注35) 文献、142頁、0354図—下(同上)。
- 37) 李徵『新疆阿斯塔那三座唐墓出土珍貴絹画及文書等文物』『文物』1975年第10期、89-90頁。
- 38) 磁県文化館「河北磁県東魏茹茹公主墓発掘簡報」『文物』1984年第4期、1-9頁。
- 39) 前出、注23) 文献〈両氏論〉の注によると、呼和浩特文物為公室『呼和浩特——草原絲綢之路的中転站』『内蒙古金融』1987年第8期、58-60頁、とある。
- 40) 洛陽市文物工作隊「洛陽龍門唐安菩夫婦墓」『中原文物』1982年第3期、21-26頁。
- 41) 寧夏固原博物館「寧夏固原唐史道德墓清理簡報」『文物』1985年第11期、21-30頁。
- 42) 前出、注21) 羅豊『固原南郊隋唐墓地』文物出版社、1996年。史道德墓は87-111頁、史索岩墓は31-54頁、史訶耽墓は55-77頁。
- 43) 前出、注42) 文献、本文151-152頁。図版は1号金貨(史道德墓出土)が図73・74。2号金貨(史索岩墓出土)が図28、カラー図版16。3号金貨(史訶耽墓出土)が図48、カラー図版17にある。また、寧夏回族自治区固原博物館・中日原州連合考古隊『原州古墓集成』文物出版社、1999年の図版113に史索岩、図版121に史訶耽、図版137に史道德の金貨のカラー写真がある。さらに、図版82に北周田弘1号金貨のカラー写真が掲載されている。
- 44) 『大黄河・オルドス秘宝展——中国・寧夏古代美術の粹』図録、NHKちゅうごくソフトプラン、1992年、35図。
- 45) 張全民・王自力「西安東郊清理の兩座唐墓」『考古与文物』1992年第5期、51-57頁。これ以前、西安市曹家堡初唐墓出土の径2糎、重さ0.97瓦、胡人打ち出し片面范金製品(『考古与文物』1986年第2期、25頁、図4-8)を、夏鼐氏が装身具と判定したことが、前出、注21) 文献162頁に引用されている。
- 46) 羅豊「關於西安所出東羅馬金幣仿制品的討論」『中国錢幣』1993年第4期、17-19頁。
- 47) 『シルクロードの都、長安の秘宝展』図録、セゾン美術館・日本經濟新聞社、1992年、88図。
- 48) 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館「朝陽双塔区唐墓」『文物』1997年第11期、51-56頁。
- 49) この金貨を、前出、注21) 文献〈羅氏表〉は1989年出土とし、出典を『第三次絲綢之路貨幣學術討論會』とする。前出、注23) 文献、〈両氏論〉はNo.23に1992年頃発見、径2.1糎、4.5瓦とし、出典を劉大有「甘肅天水發現的一枚東羅馬金幣」『香港錢幣研究会會刊』1992-7、p.47-49.とする。前出、注22) 文献、〈康氏表〉では1990年発見、径2糎、4.1瓦とし、出典を『甘肅錢幣專輯』1991年とし、本文中に「筆者は現貨幣を実見し、フォカス金貨であること疑いない。径2.1糎、4.4瓦。」と記す。また、康氏の論考中に同貨幣の拓本が図6に掲載されている。筆者はどの文献も未見であるため、同貨幣を実見した康氏の記載に従うこととする。
- 50) 商洛地区文管会、王昌富「商州市北周・隋代墓葬清理簡報」『考古与文物』1997年第4期、3-7頁。
- 51) Grierson, P., Mays, M., *CATALOGUE of LATE ROMAN COINS in the Dumbarton Oaks Collection and in the Whittemore Collection*, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D. C. pp. 136-156.
- 52) 王長啓・高曼「西安新發現的東羅馬金幣」『文博』1991年第1期、38-39頁。
- 53) 前出、注22) 康氏論考巻頭カラー図版、図4。注13) 図録、図1-7左。

- 54) 前出、注22) 康氏論考巻頭カラー図版、図3。注13) 図録、図1-7右。但し、解説にこの金貨も西安堡子村出土とするのは誤りである。
また、後出、注60) 報告書、236頁に(3) アナスタシウス I 世金貨のうちの1枚として、この金貨を西安堡子村とするのは、注13) 図録の解説に引きずられた誤りである。
また『正倉院の故郷——中国の金銀ガラス展』図録、NHK大阪放送局他、1992年、29図。但し、解説に西安東郊出土とするのは誤りである。テオドシウスとする誤りは本文で触れた。
- 55) 前出、注22) 〈康氏表〉では、出典を『新疆銭幣』1991年とする。
- 56) 屠燕治「東羅馬立奥一世金幣考釈」『中国銭幣』1995年第1期、35-36頁。
- 57) 牟世雄「甘肅隴西県発現一枚拜占庭帝国金幣」『考古』2001年第12期、88頁。
- 58) 吐魯番地区文管所「吐魯番采坎古墓群清理簡報」『新疆文物』1990年第3期、1-7頁、(『新疆考古新収獲続 ('90~'96)』p. 608. に再録、但し図なし。)
- 59) 原州連合考古隊『唐史道洛墓——原州連合考古隊発掘調査報告、1』勉誠出版、2000年、金貨は本文202-208頁、図版25上段、挿図69。
- 60) 原州連合考古隊『北周田弘墓——原州連合考古隊発掘調査報告、2』勉誠出版、2000年、1号金貨は本文(日文、以下同じ)171頁、図版29-1・6、挿図49-1。2号金貨は本文171頁、図版29-2・7、挿図49-3。3号金貨は本文171頁、図版29-3・8、挿図49-2。4号金貨は本文171頁、図版29-5・9、挿図49-4。5号金貨は本文171頁、図版29-5・10、挿図49-5。考察は234-239頁。
- 61) 樊軍「寧夏固原発現東羅馬金幣」『中国銭幣』2000年第1期、本文・拓影58頁、写真は巻頭図版一下。
- 62) 李生程「陝西定辺県発現東羅馬金幣」『中国銭幣』2000年第2期、44頁。
- 63) 羽離子「対定辺県発現的東羅馬金幣的研究」『中国銭幣』2001年第4期、15-18頁。
- 64) 閻璘「青海烏蘭県出土東羅馬金幣」『中国銭幣』2001年第4期、40頁。写真は巻頭図版4一上。
- 65) 劉宝山「青海都蘭出土拜占庭金幣」『中国文物報』2002年7月24日号。
- 66) 前出、注51) 文献、図版13、No.350-352. 参照。
- 〔付記〕 本稿校正中、51青海烏蘭県大南湾祭祀遺址の発掘簡報が発表された。
青海省文物考古研究所「青海烏蘭県大南湾遺址試掘簡報」『考古』2002年第12期、49-57頁。ビザンチン金貨は本文55頁、拓本図15、カラー写真図版8-1・2。